

# 今山八幡宮所蔵本

## 「建礼門院右京大夫集」の諸注集成（Ⅲ）

田 中 司 郎

はじめに

「建礼門院右京大夫集」の諸注集成（一）で三五九首中の二九首までを、（二）で三十首から五三首の諸注集成を試みた。今回も平成元年の翻刻作業と平成十二年から一六年までの「書き入れ」検討の過程で研究した資料を使用して歌番号五四から六四までの諸注集成を行った。

なお本書の本文は宮崎県延岡市今山八幡宮の宝物として保存されていた今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』を底本とし、群書類従所収本、細川家旧蔵九州大学図書館所蔵本、宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、静嘉堂所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、吉水神社所蔵本（下巻闕）、内閣文庫所蔵本（下巻闕）、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、昭和美術館本等を参照した。

- 1 本文は「宮崎女子短期大学紀要 第十六号 翻刻」を使用した。
- 2 諸注の引用は重点的にあげ、同説は一括して示した。引用に当たっては、著者名の敬称を省略させていただいた。異説のあるものは、そのまま示した。ときに語法、解釈、用例、鑑賞等にもふれ、簡要を期して記した。
- 3 文法は、主要な問題にとどめた。
- 4 口語訳は口語訳探求に資するために、異訳を補入した。ここに原著者に対し、非礼を深くおわびするとともに、ひとえにご許

容を乞う次第である。

- 5 原文の詞書は和歌より二字分下げて書かれ、和歌は上の句と下の句とを二行の分ち書きにするが紙数の都合で詰めて掲載した。
- 6 本文中の「書き入れ」は、「宮崎女子短期大学紀要」第二七号・二八号・二九号・三〇号に掲載したので本諸注集成ではほとんど割愛した。

### 諸注集成

#### 本文

詞書 中宮の御かたにさふらふ人をきんひらの中將のせちにいひしらふ物をのみおもふよし返々うれへられしに秋のはしめつかはしける

五四 あきうてはいとつかにかしくるらん色ふかけなる人のことの葉

かへし

五五 時わかぬ袖のしくれに秋そひていかはかりなる色とかはしる

## 諸注

中宮の御かたにさふらふ人―中宮の側にお仕えしている女房(谷)。  
 さふらふ人―仕えている女房(村井)。きんひらの中將―公衡の中  
 將で右大臣藤原公能の四男。保元三年(一一五八)生、建久四年  
 (一一九三)没。従三位左中將に至る(谷)。大炊御門の右大臣藤原  
 公能の四男、母は中納言俊忠女、すなわち藤原俊成の妹、公衡は俊  
 成の甥にあたる(本位田)(谷)。歌人、中將となつたのは、文治二  
 年(一一八六)十二月十五日、右中將となつた時からである。その  
 後、左中將に転じ、建久四年(一一九三)二月二十一日死んでいる  
 (村井)。せちにいひしらふ―「せちに」はしきりに(谷)。しきり  
 に言い寄る(久松)。せちにいひしころ―類徒本、熱心に言い寄つ  
 ていたころ(村井)。物をのみおもふ―その女房はただ思い悩んで  
 いる(谷)。物をのみおもふよし―その女房が心配ばかりしている  
 こと(村井)。煩悶ばかりする。恋の悩みに関していうことが多い  
 (久保田)。うれへられし―訴えられた(谷)。「られ」は尊敬の助動  
 詞・連用形(村井)。うれへられしに―嘆き訴えられたのに対して  
 (本位田)。秋の―「秋」に「(男が女に)飽き」を掛けるか(谷)。  
 つかはしける―正元本、「つかはしける」(本位田)。次の歌を送つ  
 たの意(糸賀)。秋きとは―(相手の男性の心に)飽きがきては、  
 の意を暗示するか(久保田)。恋の歌ではしばしば季節の「秋」に  
 「飽き」をかけるが、こゝは單純に秋の意であらう(糸賀)。いと―  
 いといとの約言。いよいよ(村井)。いかに―どんなにか(村井)。  
 しくるらん―天象の時雨とともに、涙の時雨をも意味する(久保田)。  
 涙の時雨が降っていることでしょう(谷)。「しぐる」は、時雨の動  
 詞。時雨の来ることと、涙をもよをすことをかけた(村井)。「しぐ  
 る」には、時雨が降ると、涙を流す、の意がある(糸賀)。物思い

に涙のこぼれるのを秋の時雨に託していう(本位田)。色ふかけな  
 る―「色ふかけ」は、時雨にぬれて「紅葉の色が深くなる」のと、  
 「深く物思いをする言の葉の色」をかける。評解は、好色な男性の  
 言葉とする。「しぐる」「色」「ふかけ」「葉」は縁語(糸賀)。「色ふ  
 かけなる」の「色」は、「秋」をうけて、紅葉の色と、好色とをか  
 けた語。好色らしい(村井)。古くは、時雨が降ると紅葉すると考  
 えたので、言葉を木の葉にたとえた。嘆きの色が深そうなおなたの  
 お言葉、の意(久保田)。深く物思いをしているらしい。木の葉は  
 時雨に打たれると色が深く染まると考えられていた。「色」「深げ」  
 「ここのは」の葉、いずれも時雨の縁語である(本位田)。色ふかけ  
 なる人のことの葉―ことばを木の葉に譬えたもの。時雨に濡れて色  
 を深める葉と、思いの深そうなおなたのことばとを掛けた(谷)。  
 時わかぬ―時を区別せぬ、すなわちいつも(村井)。季節を分たぬ、  
 すなわち、いつも降っている(久保田)。季節を問わない。年中降つ  
 ている(谷)。いつという時ない。季節の区別のない(本位田)。袖  
 のしぐれに―袖にかかる涙。平安中期の用例もあるが、勅撰集では  
 新勅撰集以下の中世の勅撰集に集中して現れる(久保田)。時雨の  
 ように降って袖を赤く染めている涙(谷)。秋そひて―袖のしぐれ  
 のほかにほんとうの秋の時雨のものさびしさが加わるのである(本  
 位田)。秋になつて(久保田)。いかはかりなる色とかはしる―どん  
 なに深い紅色がこぞ存じでしょうか(谷)。袖はどんな色だと思ひ  
 ですか。嘆きのために流す紅涙で真っ赤ですよ、という気持ちを暗  
 示する(久保田)。どんなに深い色に染まつたかというのと、どん  
 なに深く物思いをしているかというのを懸けてある。紅涙にそまると  
 袖が変色すると考えられていたのである(本位田)。「色とかはし  
 る」は、色とお思ひですか。「かは」は、疑問の係助詞(村井)。

## 口語訳

**詞書** 中宮御所に仕えている女房に、公衡の中将が熱心に言い寄っていたところ、その女房が思い悩んでばかりいることを、私に何度も訴えられたので、秋のはじめに慰めて送った歌（村井順著『建礼門院右京大夫集評解』による）。

五四 秋になつて時雨れると 涙でぬれている袖がどんなにかぬれ  
まさることでしょう 悩み深そうあなたのお言葉から そ  
う思われます（糸賀きみ江著『建礼門院右京大夫集』による）。

五五 たださえ物思いに袖が濡れているのに、その上に秋が来ます  
と物さびしい時雨がふつて、今までよりどんなにか袖をぬら  
しておられることでしょう。いかにも悩みの深そうあなた  
のお言葉をうかがつてそう思います（本位田重美著『建礼門  
院右京大夫集全釈』による）。

**詞書** 小松のおとゝの菊合をし給しに人にかはりて

五六 うつしうふるやとのあるしもこの花もともにおいせぬ秋をか  
さねん

## 諸注

小松のおとゝ―内大臣平重盛（本位田）（久松）。資盛の父（谷）。  
邸が小松谷にあったから小松内大臣と呼ばれた。清盛の長子。保延  
四年（一一三八）出生。重盛が大臣になつたのは、治承元年（一一  
七七）四十の時で、内大臣兼左大将となつたのである。しかし、こ  
の「おとど」は、大殿の意で、大臣・公卿をそう呼ぶから、必ずし  
もこの記事が治承元年以後のものとは考えられない。なお、彼が公  
卿に列したのは、応保三年（一一六三）二十六歳の時である。（村

井）（糸賀）。一一三八〜七九。入道太政大臣清盛の一男。母は、高  
階基章の女。承安四年（一一七四）七月八日から安元三年一月二十  
四日まで右大将、同日左大臣に遷り、六月五日これらを辞した。同  
年三月五日から治承三年（一一七九）三月十一日まで内大臣、同年  
七月二十八日出家、翌日、父に先立つて没した。四十二歳（久保田）。  
**菊合**―左右の二組に分かれ、菊の花を出し合つて優劣を競う遊び。  
和歌を伴うことも多かった（村井）（谷）。人数を左右につがい、雙  
方から菊花を出して優劣を争う。菊には歌をつけるのが通常であつ  
た。菊合の例として寛平菊合、上東門院菊合等が知られている。た  
だし、この小松内大臣家菊合の行なわれた時期の評価は、今明らか  
にし得ない。重盛が内大臣になつたのは安元三年三月のことであるが、  
この頃から天下の治安も平穏でなくなつてきているので重盛が菊合  
などを催したとは思われない。おそらく彼が大納言であつた安元一  
年頃に行なわれたものを、後に「小松のおとどの菊合」と呼ばれる  
ようになり、ここはその呼名に拠つたものであらう。この菊合の時  
期は不明（本位田）（糸賀）。し給しに―「に」は時間を表す格助詞  
（村井）。人にかはりて―ある人にかわつて。「人」が誰であるのか  
不明だが、恋人資盛の可能性もある。（谷）。うつしうふる―この歌、  
『風雅集』賀に採られている（本位田）。風雅・賀・二一八五に入る。  
詞書「小松内大臣家に菊合し侍りけるに、人に代りてよみ侍りける  
建礼門院右京大夫」。「露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋の  
久しかるべく」（古今・秋下・紀友則）などを置いて詠む（久保田）。  
菊合の菊を移植する（谷）。菊合の菊は、州浜に移し植えて出すか  
ら、こういつたのだ（村井）。菊合の菊を州浜（浜辺の形にかたどつ  
た台の上に、岩木・花鳥・瑞祥のものなどをおいて作つた飾り物）  
に移し植えて出すのでいう。菊は不老長寿の賀の花。『風雅集』賀

に入集（糸賀）。やとのあるし―家の主人。菊合に菊を出そうとする人（村井）。平重盛（谷）。この花もともに―『和漢朗詠集』上・菊に採られた元稹の詩句「不是花中偏愛菊 此花開後更無花」により菊の異名のとき意識で「この花」という（久保田）。老いせぬ秋―不老長寿の秋。「露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく」（古今・秋下・紀友則）（谷）。菊花は長寿の力があるものという思想が流布していたからこそいったもの。「露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく」（古今集）。作者のこの歌は、『風雅集』・賀に、「小松内大臣家に、聽合し侍りける人にかはりてよみ侍りける」として出ている。【評】筆者は、この歌は重盛邸で菊合が催される時、菊を出そうとする人が、よい菊を持つている男にくれといった。それで、くれといわれた男が、菊を与える時、添えて出す歌が読めないから、作者に代作を頼んだのだと思う（村井）。

## 口語訳

詞書 小松の大臣重盛が、菊合をせられた時、人に代わつて詠んだ歌

五六 移し植えなさる家の主人も、また、この菊の花も、ともに老いずに、幾千秋をもちかねることでしょう（村井順著『建礼門院右京大夫集評解』による）。

詞書 をなしおとゝの大臣の大將にてよろこひ給しにおとゝとの右大將御ともし給へりしいきおひゆゝしくみえしかは

五七 いとゝしく咲そふ花のこすゑかな三笠のやまにえたをづらねて

## 諸注

をなしおとゝ―前条と同じ重盛をいう（本位田）（久松）（村井）。「をなし」の左横に小さな二点のミセケチがあり、平仮名で「お」の小さな書き入れがある。『下宮集』に「おなし事」があり、また定家仮名遣い実例も多数見られるので、書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。この考察は、『宮崎女子短期大学紀要』第二十七号の二十八頁に掲載した。大臣の大將―大臣と大將を兼官すること。重盛は安元三年（一一七七）正月右大將から左近衛大將となり、同年三月五日内大臣を兼ねた。本文はこのことをいつている。この年、作者は二十歳ごろという。弟の宗盛も同じく右近衛大將になった（本位田）（村井）（谷）。よろこひ―任大臣のお礼言上のための拝賀（本位田）。礼を述べること。名詞。官位昇進のお礼言上のため、宮中でおこなう拝賀のこと（村井）（谷）（糸賀）。おとゝとの右大將―平宗盛。安元三年正月重盛の後任として右大將となる（谷）。宗盛は久安二年（一一四六）出生だから、この年三十二歳である（村井）。一一四七〜八五。清盛の三男、母は従二位時子。安元三年一月二十四日から治承三年二月二十六日まで右大將。内大臣に至る。一門の滅亡の際、源氏に生捕りにされ、元暦二年六月二十一日近江の篠原で斬られた（久保田）。御とも―御供（村井）。いきおい―威光。威勢（本位田）。「おい」の「お」の左横に二点のミセケチを施し、「おい」の右横に小さな平仮名で「ほひ」の書入れが見られる。「いきおい」に関する藤原定家の仮名遣い実例を見ると、高松宮本古今和歌集「いき於日」二例、御物本更級日記（定家自筆本）「いき於ひ」一例がある。行阿の『仮名文字遣』に「いきほひ 勢 威」、『和字正濫鈔』卷二に「いきほひ 勢」があり、今山本の書入れと一致する。この考察は、『宮崎女子

『短期大学紀要』第二十七号二十八頁、二十九頁にしてある。ゆゑし  
く―程度の甚だしいことをいう。並並でなく。すばらしく(本位田)。  
めざましく。形容詞・連用形(村井)。いきおいゆゑしきみえしか  
ば―威勢がすばらしく見えたので(谷)。いとゑしき―いよいよ甚  
だしく(本位田)。ますますはなはだしく。形容詞・連用形(村井)。  
咲そふ花のこすゑかな―重盛と宗盛兄弟の繁栄をいう(谷)。「花の  
梢」は平家一門にたとえている。「咲きそふ」は重盛が大臣になつ  
て、威光のいよいよ加わること(本位田)。「三笠のやま―大和国の  
歌枕。「三笠」は天皇の御蓋を意味し、近衛大将、中将、少将の別  
称として用いられる。君の御蓋として守護するという義だといわれ  
ている(谷)(本位田)(村井)。現、奈良市東部の山。近衛職の異  
名。「近衛大将 みかさ山。中少将同之」(八雲御抄・三・異名部)  
(久保田)。「えだをつらねて―上に「咲きそふ花の梢」とあるので  
「枝をつらねて」といつたのである。兄弟並んで左右大將となつた  
ことをさしている。正元本「枝をならべて」、彰考館本「枝をかさ  
ねて」(本位田)。兄弟を意味する。「連枝」を和らげていう。「枝」  
は「花」「梢」の縁語。昭本「枝をかさねて」(久保田)(村井)。兄  
弟を意味する「連枝」という漢語を和らげて言つた表現。兄弟そろつ  
て就任して(谷)。「評」重盛・宗盛の兄弟が、左右の大將になつ  
たことについては、『平家物語』・「鹿谷」に、「そのころの叙位除  
目と申すは、院・内の御はからひにもあらず、摂政関白の御成敗に  
も及ばず、ただ、一向、平家のままにてありしかば、徳大寺・花山  
院もなり給はず、入道相国の嫡男小松殿、右大將にておはしけるが、  
左に移りて、次男宗盛、中納言におはせしが、数輩の上臈を超越し  
て、右に加はられるこそ、申すばかりもなかりしか」といつてい  
る(村井)。

## 口語訳

詞書 同じ内大臣殿が内大臣を兼任された昇進のお礼言上をなさつ  
た際に、弟の右大將宗盛公がお供していらつしやつたが、そ  
の威光が立派に見えたので、

五七 ますます今を盛りと花が咲き加わる梢ですこと、三笠山に枝  
を運ねて―いよいよ榮華を極める平氏一門ですね、近衛の左  
右の大將にご兄弟でなられて(久保田淳著『建礼門院右京大  
未集 とはずかたり』による)。

詞書 いつれの年やらん五せちのほと内裏ちかき火の事ありてすて  
にあふなりしかば南殿にえうまうけて大將をはしめて衛ふ  
のつかさのけしきとも心くにおもしろくみえしにおほかた  
の世のさはきもほかにはかゝる事あらしとおほえしもわすれ  
かたし宮は御手くるまにて行啓あるべしとぞ聞えし小松のお  
とゝ大將にてなをしにやおひて中宮の御方へまいり給へりし  
ことからなといみしうおほえき

五八 雲のうへはもゆるけふりにたちさわく人のけしきもめにとま  
るかな

## 諸注

いつれの年やらん―安元元年(一一七五)十一月二十日の内裏の近  
火をさすか。『平家公達草紙』承安四年(一一七四)のこととする  
のは誤りと思われる(久保田)。いつの年だつたか。富倉氏の研究  
によると、安元元年(一一七五)十一月二十日、童女御覧の日の事  
らしい(村井)。「やらむ」は「にやあらむ」の略。これは安元元年  
十一月二十日の事であろう。「清辨眼抄」に、後清録記云。安元元  
年乙未十一月廿日丁卯。天晴。未剋訖。東寺僧正禎喜壇所内御持僧。

姉小路大宮。故兼成宅。焼亡。風起東北。余炎及禁裏。二條南油小路已東。閔院殿。已至于押小路東油小路西為灰燼了。其間主上出御南殿。公卿殿上人群參。近衛司已企柏挾入御。出衣帶胡籙。腰輿寄南殿階間。下官着毛沓參内。行幸之儀。已有沙汰之間。脱毛沓着淺沓上括。息男允季平所相具也。同上括帶私胡籙。別当殿令參給。於日華門北辺柏挾帶劍上括云々。帶日羽矢給昇殿。下官依召參南殿階下の砌。近辺小屋可令破却之由被仰下。(中略)無事炎上消了。天皇入御。帶弓箭上達部近衛司等各退弓箭。下官其後下括。云々と見える(本位田)(久松)。**五節**―大嘗会または新嘗会のある前後、すなわち十一月の中の丑の日から辰の日にわたって行われた公事。丑の日は舞姫参入、帳台の試。寅の日、殿上の淵酢、御前の試。卯の日、童女御覧。辰の日、豊明節会という順序になっている。火事のあった二十日は童女御覧の日であった(本位田)。**火の事**―火事(本位田)(村井)(谷)。**すてに**―すんでの所で。もう少しのところで(本位田)。**あふなかりしかは**―昭本「あふなくみえしかは」(久保田)。**南殿**―紫宸殿の別称。内裏の正殿。大礼・正式のおこなわれる所(久保田)(本位田)(糸賀)(村井)。**えうまうけて**―「腰輿」は手でさげてゆく輿。大嘗会御祓河原頓宮行幸、斎王の伊勢参下向、其他内裏炎上等による俄の遷幸等に用いられ、無事の時には用いないのを例とした。手輿ともいう(本位田)。輦を腰のあたりに持って二人で運ぶ輿。「手輿(たこし)」ともいった。底本「えう」、昭本など諸本により改める(久保田)(村井)(谷)。手で輦を腰の辺りに持ち上げて行く輿。軽便で、非常時の行幸や、貴人の急坂登行などに用いた。手輿。底本「えうまうけて」を諸本により改めた(糸賀)。**衛ぶのつかさのけしきとも**―内裏焼亡の時の武官の服装は前掲の「清卿眼抄」の記事のなかに見える(本位田)。「衛ぶのつかさ」

は、六衛府(左右の近衛・衛門・兵衛)の役人。宮中を警固する官庁(糸賀)(久保田)(村井)(谷)。**心く**に―それぞれ。とりどりに。思い思いに。「詞花集」秋、和泉式部の歌に「なく虫のひとつこゑにも聞こえぬはこころこころにものやかなしき」とある(久松)(本位田)。**おもしろく**―興味深く(谷)。**おほかたの世のさばき**―世の中の騒動全般(谷)。これ以後、福原遷都・平家都落ちなど、これとは比較にならないほどの大きな騒ぎが起こるのだが、この時点ではそれらは予想もしなかったものでことう。「忘れがたし」は、それらの大事件を経験したのちの今となつては忘れがたいの意(久保田)。火事の騒ぎは、内裡だけのものでなく、一般の出来事だからいったもの(村井)。**宮**―中宮徳子(谷)。**手くるま**―輦車といい、また腰車、小車とも称する。人の手で挽く屋形車で、唐車に似て、底がやや異なっている。(久保田)(本位田)。車輪を付けた屋形を人の手で引く車(谷)。

**行啓**―三后(太皇太后・皇太后・皇后)・皇太子・皇太子妃・皇太孫の外出(糸賀)(村井)。「啓」に二点のミセケチを「啓」の右横に書き入れている。初学者などを考慮し、確認のつもりで書き入れたと思われる(『宮崎女子短期大学紀要』第二十七号 二十九頁)。

**あるべしとを聞えし**―外出なさるだろうということだつた。中宮の身を案じてはいたが、避難の様子を直接見届けるような立場ではなかったのだろう(谷)。**とを聞えし**―ということであつた(村井)。**小松のおと**―平重盛(谷)。この時は右大将であつた(本位田)。**ことから**―様子。ここでは人品、風采などの意でいう(久保田)。**風情**。有様(本位田)。様子。態度。内容的には頼もしさであろう(谷)。**いみじうおほえき**―はなはだしく勇ましい姿と思つた(村井)。



## 口語訳

**詞書** いつの年であつたか、五節のころに、内裏近くに火事があり、すでに禁裡まで危険だったので、紫宸殿に手輿を用意し、大将をはじめとして、禁中警護の衛府の役人のようすなど、それぞれ趣が見えておもしろかつたので、火事というような、世間一般の騒ぎの時でも、よそではこういうことはあるまいと思つたことも、忘れることができない。中宮は輦車で行啓遊ばされるといふことだつた。重盛はその時近衛大将で、直衣の上に矢を背負つて、中宮の方へ来られたことなど、ひどく勇ましく思つた。

五八 内裏においては、火事でたち騒ぐ人々のようすも、興深く目にとまることである（村井順著『建礼門院右京大夫集評解』による）。

**詞書** やしまのおとととかやこのころ人はきこゆめるその人の中納言と申し比くしをこひ聞えたりしをたふとて紅のうすやうにあしわけをふねむすひたるくしさしたるかなの○ならぬにかきてをしつけられたりし

五九 あしわけのさはるをふねにくれなるのふかき心をよするとをしれ

かへししろきうすやうに書て

六〇 あしわけて心よせけるおふねともくれなるふかきいろにてそしる

## 諸注

やしまのおとと―平宗盛。清盛の三男、母は、平時子、中宮徳子の

同母兄である（久松）（本位田）（久保田）。宗盛を、八島の大臣と呼んだ（村井）。内大臣平宗盛。寿永二年（一一八三）十月八島（屋島）に立てこもる（谷）。平家一門は、寿永二年七月都を落ち、十月八島（香川県屋島）に行宮を造営していたので、宗盛は「八島のおとど」とも呼ばれた（糸賀）。このころ―近ごろ。作者がこの歌集を清書しているころ。宗盛を、「屋島の大臣」といつたのは、平氏は西走後、屋島にしばらくいたからだ（村井）。きこゆめる―申し上げているようだ（村井）。申し上げているようです（本位田）。その人の中納言と申し比―宗盛は嘉応二年権中納言となり、治承二年権大納言に転じ、養和二年内大臣となつた（本位田）。宗盛は仁安三年（一一六八）、二十二歳で正三位権中納言兼左衛門督となり、治承二年（一一七八）三十二歳で正二位権大納言兼春宮大夫となつた。その間の十一年中納言であつた（村井）（谷）（久保田）（糸賀）。「申し比」は群本「きこえしころ」（久松）。五節に―底本になし。類従本でおぎなう（村井）。くしをこひ聞えたりしを―櫛を下さいとお願い申しておいたのを。五節に櫛を贈ること。公の行事としては御前の試みの行われる際、舞姫が櫛を畳紙に包んで御前に奉る（『建武年中行事』）。私的にも、親しい人の間で櫛の贈答が行われた記事がある（『明月記』）など（糸賀）。「くしをこひ」は群本「五節にくしこひ」。櫛をくださいとお願い申しておいたのを。五節の櫛は建武年中行事の五節寅日の条に、「けふ御前の試あり。御殿のひさしに乱舞あり。櫛などぞおくめる」とあつて、御前の試の行われるにあたつて、櫛を畳紙に包んで奉るのをいう。これは公事として行われたものであるが、私的にも親しい人の間に櫛の贈答が行われたとみられるものに、明月記正治二年十一月十六日の条に、「即布衣参院、謁女房櫛小々志之々」とあり、また同書建暦二年十一月二

十二日の条に、「退出之間治部大輔知長於露台留予云、只今聞食參内田、賜櫛之裏之由相示也、勿拝領、恩賜之奈涙先催、其体太以美麗云々」の記事がある。かかる贈答が常に行われたことを察することができる（本位田）（久保田）（久松）。「五節に櫛こひ」（群書類従本など）。五節に舞姫が御前に献上するのになんで贈答する習慣があった（谷）（久保田）。たふとて―下さるとて。「たふ」は、バ行四段・終止形（村井）。「たふ」は下さる（本位田）。うすやう―鳥の子紙の薄く漉いたもの（本位田）。鳥子紙（ガンピ・コウソ）にミツマタを混ぜて漉いた紙）のうす手のもの。手紙に多く用いられた（久保田）。「紅のうすやうに」は「かきてをしつけられし」へかかる（村井）。薄く漉いた鳥の子紙や雁皮紙。手紙の用紙として、季節に合った色合いや色の組み合わせが使われ、紙の場合も、衣服の裏の色目に準じてきまりがあった（糸賀）。薄手の紙（谷）。あしわけをふね―蘆分小舟。蘆の生い茂った間を分けて漕いで行く小舟。多く障りのあることに譬えていう（本位田）（村井）。茂った蘆の間を分けて進む小舟。進みにくいので障害の多いことの比喩とされる。ここではその作り物が櫛に付けられてあったか（久保田）。蘆の間をかき分けて進む小舟。本歌とした人麻呂歌（『拾遺集』恋四）のように、障害の多い恋の比喩として用いられる（糸賀）（谷）。「あしわけをふね」は群本「あしわけをふねを」（久松）。「をふね」の「ふ」の右横に、「舟」を書き入れている。九州大学図書館蔵本、吉水神社所蔵本、寛永刊本、天理図書館蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は「をふね」、無窮会神智文庫所蔵本は「を舟」、内閣文庫所蔵本は「小船」で三通りの表記が見られる（『宮崎女子短期大学紀要』第二十七号 二十九ページ）。むすひたる―描いた。櫛の模様として若分小舟が、彫刻か象眼かで描かれていたのだ。この用語

は「二十六、とかく物おもはせし人」の条にも、「洲浜のかたむすびたるに」と用いられている。また、「刺繡むすばせて、をかしげなるも、またうれし」（枕草子）という用例もある（村井）。精巧に作った。蘆分け小舟の模様が彫刻か象嵌した櫛を、宗盛が作者に贈ったのである（久松）（糸賀）。「喜遊笑覧」巻一下容儀の項に、此処を引いて、「結ぶとは物の形を糸ばなして造り出で櫛のむねに付くるにや」ともい、「手をこめて作れるを結構と云ふごとく、巧に作れるを結ぶとはいへる敷」とも言っている。本集の後の方に、「里なりし女房の藤壺の御前の紅葉ゆかしき由申したりしを、ちり過ぎにしかば、結びたる紅葉をつかはす枝にかきてつく。」云々であるが、これはほんとうの紅葉は散つてしまつて、今はないわけであるから、「つかは」した紅葉は、もちろん糸花が何かで作ったものであつたに違いない。が、同じく、「父おとどの御ともに住吉にまうでて、洲浜のかたの結びたるに、貝どもを色々に入れて。」云々とあるのはどうであろうか。洲浜の形を糸花で作るといのはどうも考え難いと思われるのであつて、むしろ後の巧に作ったという方が当たっているのではなからうか。そう思えば、小舟ならともかくとして、蘆分小舟を糸花で作るというのも、ちよつと想像し難いではないか。従つて、結ぶというのは、すべて糸花に限らず、精巧に作るという意味だと考えておいた方が無難であろう。ところで、この「蘆分小舟を結びたる櫛」の實際を考えてみるのに、「百鍊抄」寛元元年十一月二十四日の条に、五節節約のことを仰せ出された記事があるが、その中に、五節の櫛に金銀銅鈔珠玉を交えることを禁止されている項がある。これは前掲の「明月記」の記事と共に、当時の五節櫛の華麗さを想像させるに足るものであるが、これもかように蘆分小舟を彫刻または象嵌した豪華なものだつたろうと思われ



るのである（本位田）。模様を刻んだの意か（谷）。**なのめならぬに**——たいそうりつばな櫛に。ここは、「吾分小舟むすびたる、なのめならぬ櫛さしたるが」の意（村井）。並でなく立派なのに（久松）。詞書「なの」と「ならぬ」の間に○が記入され、○の右横に「め」が小さく書き入れられている。「め」の脱字として書き入れた考える（『宮崎女子短期大学紀要』第二十七号 一九五八）。**をしつけられたりし**——遠慮がちにためらっている右京大夫に無理に受取らせている光景が想像される（本位田）。**あしわけのさはるをふね**——右京大夫に好意を持ちながら近づく機会のない宗盛自身の比喻（久保田）（谷）。「さはる」は障碍のある。故障の多い（本位田）。障る。さしつかえる（村井）。**くれなゐのふかきこころ**——宗盛の寄越した紅の薄様を指す。「赤心」「丹心」などの漢語を和らげて言つたもの。宗盛自身の真心（久保田）（谷）。**よするとをしれ**——「を」は間投助詞。この例のように、文末が命令形あるいは願望・希求・決意などの表現である時、用いられることが多い（本位田）。「よす（寄す）」は、「小舟」の縁語（久保田）。**しろぎうすやう**——宗盛の紅の薄様に対抗したか（谷）。**くれなゐふかきいろ**——紅深い薄様の色（谷）。**六〇の歌**——鸚鵡返し之歌であり、宗盛に対しては真剣に向き合っていない感を受ける。次の歌から始まる資盛関連歌の導入的な役割を果たしているのかもしれない（谷）。**六〇の歌 心よせけるおふね**——「おふね」の「お」に二点のミセケチを施し、「を」を「お」の右横に書き入れている。今山本の五九の歌は「をふね」と表記し、六〇の歌は、「おふね」と書写し、「お」の右横に「を」を書き入れて統一されていない。「ふね」も仮名表記（五九・六〇の歌）と漢字「舟」（詞書 書き入れ）表記があり、統一されていない。このことから今山本の書写と書き入れの段階で複数の人物が関わっていたと思わ

れる（『宮崎女子短期大学紀要』第二十七号 一九五八）。

## 口語訳

**詞書** 八島内大臣とか、このころ世人は申しあげるようだが、そのお人が中納言と申したころ、櫛をくださるよう申しあげたところ、くださるということで、紅の薄様に、蘆分け小舟の飾りを付けた櫛を挿してあるのが、並々でなくすばらしかったが、それに次のように書いて押し付けられてあつた。

五九 この蘆分け小舟のように、たとえ障害があつても、わたしは深い真心をあなたに寄せているとわかつてください。

べ返事は、白い薄様に書いて、

六〇 蘆を分けて――障害を乗り越えて、わたしに心を寄せた小舟――あなた様だと、深い紅の色でわかりました（久保田淳著『建礼門院右京大夫集 とはずかたり』による）。

**詞書** なにとなくみきくことに心うちやりてすくしつゝなべての人のやうにはあらしとおもひしをあさゆふ女たちのやうにましりゐてみかはす人あまたありし中にとりわきてとかくいひしをあるふしきことやと人のことをみきくてもおもひしかと契とかやはのかれたくおもひのほかは物おもはしきことそひてさま／＼おもひたれしころさにてはるかににしかたをなかめやるこそゑはゆふひの色しつみてあはれなるにまたかきくらししくるゝを見るにも

六一 ゆふひうつるこそゑの色のしくるゝに心もやかてかきくらすかな

## 諸注

なにとなく―何とも思わないで。二二は、「見聞くこと」に、心をうちやりて、なにとなくすぐしつゝ」の意。資盛と恋愛におちいったことを述べているのだ。資盛が手紙をくれたり、資盛が自分を思っているというわさを、見たり聞いたりするたびに、何とも思わないでの意(村井)。群本は「なにとなくて」(久松)。みきくことに―ひとの恋愛事件を見たり聞いたりすること。二二に「事に」と考える説もあるが、そうではあるまい。見たり聞いたりしてもその時はいつも、というような気持と見たい(本位田)。恋愛めいた歌の贈答や、言い寄る男性の言葉を見たり聞いたりするたびにいつも。「見聞くこと」にする説(評釈)もある(糸賀)。「見聞く毎に」と解する説もあるが、「毎」は体言に付く場合が多いことから、ここでは「見聞くこと」に解する(久保田)。男がよこしてくる恋愛めいた手紙やことばに(谷)。心うちやりて―「うちやり」は放任する、捨てておくという意味。「心うちやり」で気にもとめないで、というような意味になる(久松)(本位田)。気を晴らして(谷)。心を慰めて。気を晴らして(久保田)。心にかけないで(村井)。なべての人のやうにはあらし―並の女房のように真剣な恋愛などするまい(谷)。世のつねの人のように恋愛事件を起したりなどはすまい(久松)(本位田)。しかし、あの人は一般の男性のようではあるまい(村井)。女とち―女同士。名詞(村井)(久保田)(糸賀)。女友達(本位田)。みかはす人―顔をあわせる人。人は男、公達である(本位田)。いひしを―求愛したのを(久保田)。とりわきてとかくいひしを―(資盛が)格別に何やかやと言ひ寄つて来たのを(谷)。あるふしきことや―書本・群本「あるまじきこと」(久松)。諸注釈「あるまじきことや」で語釈している。あるまじきこ

とや―あつてはならないことであろう。「思ひしかども」に懸る(本位田)。恋なんか決してしてはならぬ(谷)(糸賀)。あつてはならぬことだ。「や」は感動の終助詞(村井)。底本「あるふしき」、昭本など諸本により改める(久保田)。人のことをみきくても―人が恋愛事件で苦しむのを見たり聞いたりするにつけても(久松)(本位田)。「人のことを見聞きても」は挿入句(糸賀)。「人のこと」は他人の恋愛(村井)。「人のこと」は、仲間の女房の恋愛沙汰。それはだいたい、女が不幸な目にあうことが多かったので、それを見聞きしていた作者は、恋愛などするものではないと、かたくなな決意をしたのであろう(久保田)。契とかやは―宿命とかいうものは(村井)。「契り」は前世からの約束。因縁。前世からの因縁(本位田)(糸賀)(久松)。のかれかたくて―昭本「のかれかたくてや」(久保田)。「のかれかたくてや」の下に「あらむ」が省略されている。作者の意見が注釈的にはさみこまれているのである(本位田)。おもひのほか―思いがけず(谷)。おもひのほか―物おもはしきことそひて―右京大夫は、資盛との交渉のはじめを語る時、いつもこういう表現をしている。詳しい事情は後で出てくるが、右京大夫と資盛との縁が結ばれる際にはかなり複雑ないきさつがあつたようである。すなわち、彼女と藤原隆信との交渉がある程度進行中であつたさ中に、突如として資盛との縁が結ばれる、そしてそれにもかかわらずなお執拗な隆信の求愛が続くので、彼女は結局それにも負けてしまう、といったようなことがあつたので、一方ならぬ物思いをこのような言い方で表現したものと考えられる(本位田)。恋の「物思い」の初出。この後、六三・六四・六七・六八にも見られ、七六の詞書「とかく物思はせし人の殿上人なりし頃、父おとどの御供に、住吉にまうでて」などによつて、平資盛との交渉が始まつた

ことが知られる。治承年間（一一七七〜八）の初め頃か（糸賀）。資盛と関係のできたことをいう（村井）。資盛との関係について、意外にも物思いが加わってあれこれ思い乱れていた頃（久松）。思いがけない資盛との恋の苦悩（谷）。さとして―「さと」は実家。宮仕えの場所に対していう（久保田）（谷）。内裏でなく自分の家をいう。里邸（村井）。宮に対する里で、宮仕えをする人の自宅（糸賀）（本位田）。宮中からさがつて自宅にいたとき（久松）。ながめやう―眺めは物さびしい気持で見る（本位田）。景色を眺めながらつくづく自分の二ころの中を見つめて、物思いにふけること（糸賀）。ここで文が終止しているのだ。右京大夫の文体には、連体中止法が多いことを忘れてはならぬ（村井）。あはれなるに―心がうち沈むのに（村井）。ゆふひの色しつみて―「しつみて」は華やかなの反対。光が弱く昏い（本位田）。かきくらししくるゝ―暗くなつて時雨が降る（谷）。「かきくらし」は曇り。「かき」は接頭語（村井）。ゆふひうつる―この歌、「玉葉集」恋四に載る（本位田）。玉葉集・恋四・一六六〇に入る。詞書「思ふこと侍りけるころ、梢は、夕日の色沈みて、あはれなるに、またかき暗ししぐるるを見侍りて 建礼門院右京大夫」。「夕日うつる」の句は、勅撰集ではほかに風雅に二例。「梢の色」の語は、玉葉集に二例が見出され、京極派好みの表現（久保田）。「うつる」は「移る」で夕陽の光が薄くなつていくこと（村井）。夕日が反映する。風雅集に二例用例がある（谷）。やがて―同時に。そのま（本位田）。それにつれて。そのまま（村井）。二すゑの色―紅葉した梢の色。「かねてより梢の色を思ふかなしぐれはじむる深山辺の里」（山家集・上）▽涙を暗示する時雨と、明から暗に移ろつてゆく風景とが描かれている。この風景は、涙と変化にみちた、作者と資盛の運命を象徴するものである。出会つた当時の

心境を反映しているというよりも、後年の回想によつて見出された風景と考えるべきではないか。谷知子『建礼門院右京大夫集』六一〜六四番の解釈をめぐつて」（『玉藻』平76・6）参照。また、『源氏物語』薄雲巻の光源氏が藤壺死去を悲しむ場面（「入り日さすみねにたなびく薄雲はもの思ふ袖にいろやまがくる」）を想起させる（谷）。

【評】資盛と結ばれたことを告白している。婉曲な言い方であるので、ここもみな誤訳をしている。『源氏物語』などと比べたら、この家集などは問題にならぬやさしい文章であるのに、誤訳がむやみに多いのは問題である。これは古典文学を文学的に見ないで、史実的に見ようとしている今日の国文学学界一般の傾向が毒しているのだ。いくら国文学者でも、まず文学というものがわかつていなくては駄目だ。少し心の奥を描いた文章になると、すぐ誤訳をするのでは話にならぬと思う。「なべての人のやうにはあらじとおもひしを」のかかつて行くことばは、「あるまじきことやと」である。つまり、「一般の浮気な男性のようではあるまいと思つていたが、資盛との恋愛沙汰などは、あつてはならぬことだ」の意で、ある。「あさゆふ……いひしを」までは、資盛のことをもう少し具体的に述べたのである（村井）。\*「なにとなく忘れがたくおぼゆることども」を書き連ねる家集に、最初宮中での華やかな回想を配置した作者は、このあたりから、資盛との、悩み多く、やがて悲劇に終る恋の追憶の中に身を浸す叙述を、展開しはじめる（糸賀）。◇初めて語られる、資盛との恋の芽生えについての回想。「なべての人のやうにはあらじ」という表現に作者の自意識の強さがよく出ている。しかも逃れることのできない「契り」の前には、所詮「なべての人」となり終つてしまうところに、女性としてのうずくような悔恨が尾を引

くのである（久保田）。

## 口語訳

**詞書** あの人を私を思っているということ、見たり聞いたりするごとに、私は何とも思わず、気にかけないで過ぎしつづ、しかし、あの人是一般の男性のようではあるまいと思っていたが――朝夕女同士のようにいつしよにいて、見かわす男性もたくさんあつた中で、とりわけあの方はいろいろと私に言い寄つたが、私はあつてはならぬことだと、人の恋愛を見たり聞いたりするにつけても思っていたけれども、宿命とかいうものは、のがれにくくて、思いがけなく、物思わしいことが身に添つて、さまざま思い乱れていたころ、自宅で遙か西の方をながめていた。梢には夕陽の色が消えて、心ふさぐのに、また、空はかき曇つて、時雨れるのを見るにつけても、

六一 夕陽の色がだんだんうすれてゆく梢に、時雨が降っているのを見るにつけ、自分の心もそれにつれて、かき曇ることである（村井順著『建礼門院右京大夫集評解』による）。

**詞書** 秋の暮れおましのあたりになきしきりくすのこゑなくなりてほかには聞ゆるに

六二 とこなるゝ枕のしたをふりすてゝあきをはしたふきりくすかな

## 諸注

**おまし**――御座所。「昼の御座」「夜の御座」などの言い方もある（久保田）。御座所。天皇または貴人の日常居る所で、寝所にもなる。此処は中宮の御座所（久松）（本位田）（村井）（糸賀）（谷）。きりぎりす――こおろぎのこと。作者と悲しみを共有する心の友として詠

まれていると見たい。類歌「もろともに鳴きてとどめよきりぎりす秋の別れは惜しくやはあらぬ」（古今・離別・藤原兼茂）（谷）。今の蟋蟀をこの時代には「きりぎりす」と言つた。「なけやなけよよもぎが柚のきりぎりす過ぎゆく秋はげにぞ悲しき」（曾禰好忠、『後拾遺集』秋上）、「きりぎりす夜寒に秋のなるままによわるか声の遠ざかりゆく」（西行、『新古今集』秋下）（村井）（久保田）（糸賀）。こおろぎ（本位田）（久松）。とこなるゝ――寝床として馴れている（村井）。臥しなれた（本位田）。寝床に（または寝床で）馴れる枕、すなわち、臥し馴れる枕。「七月在野 八月在宇 九月在戸 十月蟋蟀 入我牀下」（詩経・国風・豳）、「秋深くなりにつけしなきりぎりすゆかのあたりに声聞こゆなり（千載・秋下・花山院）（久保田）。枕のした――中宮の後座所の枕下。「とこなるゝ」といつたから「枕の下」と続けたのである（本位田）。人の涙の溜まる場所。「いかはかりまぐらのしたもこほらんなべてのそてもさゆるこの比」（一〇六）（谷）。「枕のしたのきりぎりす」は「露しげき野辺にならひてきりぎりすわが手枕の下に鳴くなり」（金葉・秋・前斎院六条）「黒髪の別れををしみきりぎりす枕の下に乱れ鳴くかな」（待賢門院堀河集）のように、涙の溜まり場であるかのように鳴く（泣く）のである。この歌も、変化する風景と涙というモチーフが詠みこまれている（谷）。あき――「秋」に「飽き」を響かせる（久保田）。「きりぎりす」「枕」「秋」の三者を擬人化し、「きりぎりす」を中心にそれぞれが恋愛関係にあるように見立てた歌（久保田）。あきをはしたふ――「秋」と「倦き」とを懸けている。ふしなれた枕のあたりを倦いてふり捨て、過ぎ行く秋を恋しがつてないという意味である（本位田）。「あき」には「飽き」が響いている。六一・六二は詞書に「さまざま思ひみだれし頃」、「つねよりも思ふことある頃」

とあり、六一の「やがて」という表現に見られるように叙景が叙情に連続している。六二も同じ時期の物思いの状況からの詠出と考えられるが、きりぎりすに託した寓意が不可解である。奔放に振舞う資盛に対する、作者の恋心の動揺かもしれない（糸賀）。

## 口語訳

**詞書** 秋の暮れに、中宮様の御座所のあたりで鳴いていたこおろぎの、声が聞こえなくなつて、よそでは聞えるので、

六二 わたしが臥しなれている枕の下をふり捨てて、自身に飽きてしまったかのように過ぎ行く秋を慕っているなんて、おかしなこおろぎよ（久保田淳著『建礼門院右京大夫集 とはすがたり』による）。

**詞書** つねよりもおもふ事ある比をはなか袖の露けきをなかめいたしつゝ

六三 露のおくおはなか袖をなかむれはたくふなみたそやかてこほるゝ

六四 物おもへなけくとなれるなかめかなたのめぬ秋のゆふくれの空

## 諸注

**事ある比をはなか袖**―「を」に二点のミセケチを施し、右横に「お」を書き入れている。「お」の書き入れは定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと考える（『宮崎女子短期大学紀要』第二七号 三〇ページ）。**いたしつゝ**―「つ」の右横に「て」を書き入れている。九州大学図書館所蔵本も「いたしつゝ」であり、二本だけが「いたしつゝ」である。宮内庁書陵部所蔵本他六本は「いたして」、内閣文庫所蔵本は「わたして」である。この詞書の部分は「いたして」

が自然である（『宮崎女子短期大学紀要』第二七号 三〇ページ）。

**をはなか袖の露けき**―「尾花」は、薄。人の袖に見立てられる。露に濡れた薄は、涙で泣き濡れた人の袖のように見える（谷）。「尾花がそで」は、薄の穂が風に揺れる有様を、人を手招きすると見立てている。薄は女性に見立てられる。「比べばや尾花が袖の露けきに今朝たち帰るわれが袂を」（忠盛集）（久保田）。「尾花が袖」は、薄の花穂が風に吹かれて靡く様子を、恋しい人を招く衣の袖にみたてたもの（本位田）（村井）（糸賀）。**なかめいたしつゝ**―家の中から外の尾花を眺めているのである（本位田）。物思いにふけて、部屋の中から外を見ること（村井）。吉水神社本その他「露のおく」（本位田）。**露のおく**―「おく」の「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。九州大学図書館所蔵本も今山本と同じ「おく」であるが、宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、内閣文庫所蔵本は、書き入れと同じ「をく」である。「契おきし」（三二 歌）で述べた通り、『下宮抄』と定家仮名遣い実例に多数の用例が見受けられるので定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと考える。**たくふなみた**―露の仲間になる涙（久保田）。「たくふ」は、一緒になる、伴うの意。露に濡れて靡く薄は、来ない人を待ちあぐんで涙に濡れる女性のように思われ、作者はついにそのような風景にも自分の物思いの感情を移入して涙にくれる（糸賀）。同類である（谷）。ともなう（本位田）。添う（村井）。**やかて**―すぐ（村井）。そのまま。外界の現象が自分の内面に直結する様子をいう（谷）。**六四**の「なけく」―「く」の右横に「こい」の書き入れが見られる。九州大学図書館所蔵本も同じ「なけく」であるが、『建礼門院右京大夫集 校本及び總索引』の頭注に「彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本『なけく』の如く見ゆれども一往『く』を『く』



とよむ」とある。宮内庁書陵部所蔵本は「なけこと」、内閣文庫書蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、群書類従所収本は「なけゝ」、架蔵甲本は「なけ」<sup>1</sup>と写本異同が多い箇所である。今山本の書き入れ「なけこ」の写本は見当たらない。この表記の祖本があつたかもしれない（『宮崎女子短期大学紀要』第二七号 三〇ページ）。**なれる**―成れる。作られている。出来ている。このところ頭韻を踏んでいる（本位田）。**たのめぬ**―頼みにならない。晴れているかと思うとさつとしぐれてくる頼みにならない空模様（本位田）。頼みにならない、の意。頼みにならない恋人と、晴れ曇りの定めやらぬ変わりやすい秋の空が重なっている。「四・五句に『男』ころと秋の空』式の感懷をこめている」（集）。秋の夕暮の空を眺めて待つていても、あの人はあてにならず、物思いと嘆きが深まるばかり。それでつい秋の夕暮の空が「物思へなげ」<sup>2</sup>と勉めるように思ってしまう。これも作者のなかにある感情を夕暮の空に投影して見ているのである（糸賀）。「たのめぬ」は、頼みにならぬ。「たのめ」は、マ行下二段・未然形。「ぬ」は打消の助動詞・連体形（村井）。「頼めぬ秋の夕暮れ」は、恋人が訪れると期待させたわけではない秋の夕暮れ。「秋」に「飽き」を響かせる。夕暮れは恋人同士の場合、男が女のもとを訪れる時刻だが、自分の場合はそれを期待できないので、「嘆けとなれる」という（久保田）。あてにできない。恋人を待つても会えるあてがないの意と、晴れ曇りの定まらない飽きの空とを掛けている（谷）。**ゆふくれの空**―古来恋人を思つて眺めるものとされる（谷）。六一―六四は、時雨・枕の下・きりぎりす・露・尾花・秋の夕暮の空という涙を暗示する素材を用いている点と、断続的に降る時雨・一所に止まらないきりぎりす・変化しやすい秋の空という変化しやすい風景を描いている点で共通している。これらの

風景は、資盛との悲しい運命を象徴しているかのようで、四首は一続きのものにとらえ、後年の回想によつて詠まれたものと考えたい（谷）。

## 口語訳

**詞書** いつもより物思いをせられることのある頃、家の中から、人を招くような薄の穂が露にひどく濡れてまるで泣き濡れているようなのを、物さびしい気持でながめやつて、

六三 露のいつばいおいている薄の穂先を眺めていると、それにつられて涙が同時にこぼれてくることです。

六四 晴れているかと思うとすぐしぐれてくるあてにならない秋に夕暮の空は、物思いをせよ、嘆息せよといつて出来ている眺めのような気がしますこと（本位田重美著『評註 建礼門院右京大夫集全釈』による）

## おわりに

今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』を国文科共同研究の対象にふさわしいものとして翻刻作業をしたのは平成元年六月から七月にかけてであつた。この翻刻作業の過程で二百五十余りの書き入れ、夥しいミセケチ、検討を要する校合等が出てきた。これらの考察を「宮崎女子短期大学紀要 第二七号・二八号・二九号・三〇号に「今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）（二）（三）（四）」として発表した。この考察の過程で、多くの研究資料に、<sup>3</sup>教示いただいて仮名遣い資料などの理解を深めることができた。感謝の念で一杯である。今回は、前回に引き続き、「書き入れ」、夥しいミセケチ、校合等を考察する過程で、<sup>4</sup>教示いただいた諸注の集約を試みた。前回、五三番までであつた。今回は、五四番から六



四番までの諸注集成を行った。今回行った諸注集成の五八の「雲のうへは」は、宮中の火事で多くの人が立ち騒ぐ歌である。しかし、この非常事態にも作者は殿上人の優雅さにみとれている。また、冒頭で「なにとすれはわすれかたくおほゆることゝも」と書き始めた家集に、最初宮中でのなやかな思い出を述べた作者は、六一「夕日うつる」あたりから、資盛との、苦悩多く、やがて悲しみに終る恋の思い出の中に身を置く歌を詠むようになる。

### 使用文献

- 本位田重美著『評注 建礼門院右京大夫集全釈』（武蔵野書院 一九七四）
- 久松潜一校注『日本古典文学大系八〇 平安鎌倉私家集 建礼門院右京大夫集』（岩波書店 一九六四）
- 久高文著『建礼門院右京大夫集』（桜楓社 一九六八）
- 井狩正司著『建礼門院右京大夫集 校本及び総索引』（笠間書院 一九六九）
- 村井順著『建礼門院右京大夫集評解』（有精堂 一九七二）
- 草部了円著『世尊寺伊行女 右京大夫家集』（笠間書院 一九七八）
- 糸賀きみ江著『新潮日本古典集成 第二八回 建礼門院右京大夫集』（新潮社 一九七九）
- 久會伸昇著『昭和美術館蔵 伝建守国夏 建礼門院右京大夫集と研究』（ひたく書房 一九八二）
- 今井卓監修『建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』（勉誠社 一九九〇）
- 大原富枝著『朝日文芸文庫 建礼門院右京大夫』（朝日新聞社

一九九六）

- 久保田淳 校注・訳著『新編日本古典文学全集四七 建礼門院右京大夫集・とはずがたり』（小学館 一九九九）
- 谷知子校注『建礼門院右京大夫集』（『和歌文学大系二三 式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』明治書院 二〇〇二）
- 平林文雄編『九州大学附属図書館細川文庫蔵 建礼門院右京大夫集』（和泉書院 一九八六）
- 共同研究 後藤多津子 田中司郎 塚本泰造 原田真理 今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』翻刻（宮崎女子短期大学紀要 第一六号抜刷 一九九〇）